創立30周年を迎えて

理事長　**小久江栄一**

新薬承認の調査会で，「抗菌剤の臨床試験薬効基準は治癒率70%でしたね」と座長がおっしゃる。治癒率が70%を超えなければ薬剤として産業的に意味がない，ということであろう。事務局もうなずくし，説明する申請者の製薬メーカーも承知の様子。本日の審議は犬の慢性皮膚感染症を治療する抗菌薬である。「“70%”という数字はどこからきたのですか」とそっと隣の委員の先生に聞いたら，わが研究会が出した数値であることを教えてくれた。そういえば動物用抗菌剤研究会の作業部会で，急性肺炎のときに使う抗菌剤がどのくらいの治癒率なら，有効と判断するかを検討した憶えがある。その我々の検討結果が公の場で許認可のハードルとなっている。わが研究会の存在感を思い知り，身のほど知らずに理事長を仰せつかった事を反省した。

ただ反省は反省として，急性肺炎と慢性皮膚感染症の治癒率を一律“70%”で線引きすることが頭に残った。感染症でも熱発している急性肺炎にしかるべき抗生物質を投与すれば，かなり確実に症状を改善して治癒させるであろう。70%以上の治癒率がなければ困る。しかし病原菌が深部に棲みついた真菌感染もある慢性皮膚感染症では，70%は“きつい”のではないか。この“70%”という数値はガイドラインであって規制ではない。サイエンスのマニュアル化は禁物だが，行政は規制が仕事だからそうした線引きをしたがる。仕事の性格である。だから規制を受ける側が科学的に根拠を示して，別の数字を調査会に納得させてくれれば良いのである。そうした日頃の苦労が科学の進歩に繋がる。

日本の獣医教育は希薄である，と皆さんおっしゃる。私も同感するところないわけではないが，学部教育にそれほどの不安はない。言い出したら切りがない。学生は好奇心を持って元気に卒業してくれれば好い。問題は卒後教育の部分である。「卒後教育の場とそれを受ける獣医師の意欲」が問題である。社会に出てからの勉強で個人の価値が決まり，その総合で国のサイエンスのレベルが決まる。

動物用抗菌剤研究会では毎年の総会時に特別講演やシンポジウムを開いている。これは立派な卒後教育である。昨年も今年も面白かったし勉強させてもらった。今後も盛大な卒後教育の場になるであろう。また，来年から「内科アカデミー」という組織ができる。わが研究会も参加を求められてその方向で話しが進んでいる。この場でも，動物用抗菌剤研究会が日本のサイエンスに貢献できることがあると思う。抗菌剤をテーマに日本のライフサイエンスのレベルアップを計るのは，わが研究会設立の目的に適うはずである。